

### しらさぎ 白鷺に会えて

坂戸から富士見市に移転して四十数年になります。20年前からは富士見川越バイパスを使って、ふじみ野市内に週2回、日本舞踊の稽古に通っております。



2年前に踊りの演目で「鷺娘」を習っていたこともあり、バイパス脇の田んぼの中に数羽の白鷺がいるのを見て何とも可愛らしく美しい鳥だと思いました。

この辺は、昔から田んぼや川が多くあり、白鷺にとっては良い餌場なのでしょう。それを物語るように「ふじみ野市立さぎの森小学校」が近くにはあります。

今、田んぼも産業団地化の工事が進められている場所があり、白鷺の餌場が少なくなりつつありますが、いつまでも白鷺たちが見られる景色が残されればと願っております。(川村)

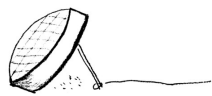


刈り後の田に降り立った鷺一羽

### スズメ捕り

スズメは、人家の近くに生存する鳥と言われるが、近年、そのスズメが少なくなっているという。

テレビも、もちろんゲームなどない子ども時代は、スズメ取りで遊んだ。竹製の篩や箕を棒で立て、下にコメをまいておく。棒に縄を縛り付け、障子の穴からのぞきながら、ひたすら家の中で待つ。コメをついばみに来たら棒を引き生け捕りにする。捕って何をするわけでもないのによく遊んだ。



大人になり、中国の作家魯迅の小説の中に、こんな風景を見つけたときは、世界的な遊びなのだと感じたことを思い出す。(両角)

### 増え続けるセキレイ

5月から6月にかけて、隣の家の電力計ボックスで、ハクセキレイが2度卵を育てて巣立ちをしました。毎日親鳥が2羽交替で餌を運び、箱の中からは小鳥の声が聞こえました。

ハクセキレイは世界中に広く分布するタイリクハクセキレイの一亜種で、20世紀後半から北海道や東北から関東や中部に広がり、東日本では普通に見られるようになったそうです。食性は雑食で、都市部では人間の食べこぼしを食べることもあり、人をあまり恐れず町中のどこでも巣を作るそうです。(笠原)



### いとおしき

# 身近な生き物たち



この季節は繁殖のための食欲と交尾の時期でもあるらしい。気になって、次の日も覗いてみたら姿が見当たらない。どこに移動したのか？見つけた日から9日目の昼過ぎ、産卵の大役を終えたのか、石露鉢の置かれた芝生の上を、やせ細り大儀そうに這うカマキリの姿を見て痛々しく思う。以後、その姿はなく、残されたのは近くの枯れかけた大葉の枝の卵鞘だけだった。カマキリの中には、交尾中に雄の身体を食べる栄養をとり、通常の約2倍産卵する雌もいるという。また、カマキリには寄生虫(ハリガネムシ)が棲みつき、このハリガネムシが宿主の入水行動などを操るとも言われている。(川上)



### メダカの話

私の少年時代、今から80年以上も前の記憶でしたが、ひょっとした話からメダカを食ったと言ったことが「えっ！メダカを？」となり、普通はメダカを食べることはないようですが。でも少年時代は、近所の田んぼにはドジョウ、赤蛙、イナゴ、ハヤ、フナ、タナゴ、えびがになどがたくさんいて、小さな網で簡単にとることができました。

そんなとき、4~5cmほどのメダカの一群を見つけ、それらを捕まえ持ち帰り焼いて食べました。味は覚えていませんが、今思うと大きさからいってハヤの稚魚だったかも。

でも、ちょっとした話題が昔の懐かしいことを思い出させてくれました。



### クイズ

次の漢字は何と読みますか？

- ① 丁斑魚 ② 丁斑魚 ③ 鱒 ④ 麦魚
- ⑤ 撮千魚 ⑥ 目高 ⑦ 将魚 ⑧ 青将

答え いずれも「メダカ」と読みます。

(萩原)

### 庭に住むガマガエルたち

初冬のある日、庭の落ち葉をかき集めているとガサガサと音を立てて何かが動いた。見ていると落ち葉の下からガマガエルが1匹、のそりと出てきた。割と大きい。背中や皮膚の黄色や黒色がどこか毒々しい。実際、ガマガエルの皮膚は毒を分泌していて、耳下線の下から毒液を発射することもある。人に対してどの程度の毒かは知らないが、さすがの私も手に載せる気になれない。ガマは目を離れたすきに消えた。移動する時は見かけによらず素早く動くのだ。カエルだが水際に住んでいるわけではない。紫陽花の暗い根本で大きな蟪蛙を見たこともある。落ち葉の下にいたのとは大きさが違うので、移動していなければ、2匹の蟪蛙が庭に住み着いていることになる。暗い木の下に異形の生き物が生息しているという感覚は蟪蛙ならではだ。ちなみにガマガエルも蟪蛙も同じカエルの名称だそうだ。



庭に住み着いているのはガマガエル、ヤモリ、トカゲとあまり人に好かれぬ地味な小動物だ。だが人目を避けつつ懸命に生きている彼らを見ると、「ここで元気に暮らして行って下さい」と言ってあげたくなる。(熊井)

### こんなところにコウモリが

我が家の3階にあまり使わない部屋があり、西日が射すためいつも雨戸を1枚だけ閉めています。初冬の日、そのガラス戸を開けた瞬間、黒い塊がコロッとレール上に落ち、思わず何も考えず瞬時の動作で指でつまみ外に放り投げました。その物体は隣家の1階の赤い屋根の上に落ち、動きませんでした。心配で眺めていると、5分ほどしたら次第に体を動かしてコウモリの姿に変身し、10分ほどで飛び立ちました。



冬眠の時期なのに、1匹だけ取り残され、ガラス戸と雨戸の狭い隙間に、西日の当たる暖かな場所を選んだのかなと、親しみを感じた出来事でした。

人家に営巣するのはアブラコウモリで、吸血はしないし、クモ、ゴキブリを食べしてくれる益獣とみられています。また、感染症の媒介者になることもあるので、飼育するには届出が必要とのこと。(吉田)

### ヤモリの訪問

身近な生き物は、毎年夏になると我が家にヤモリが訪れます。公園が近いので餌となる虫がいるのか、窓ガラスに張り付いている姿をよく見かけます。毎年訪れるヤモリを家族で楽しみにしています。



ヤモリはトカゲの仲間で漢字では「家守」。ヤモリと呼ばれていますが、正式にはニホンヤモリです。(井之川)

### カルガモの親子

カルガモの親子がある朝、車や通勤の人が多い道路を歩いていて、近隣の人たちが大騒ぎをしました。近くに水のたまるような池や川はなく、どこから来たのか全くわかりませんでした。結局は捕まえて市の人に頼んで荒川近辺の県の保護区に連れて行ってもらいました。その後も、他のところでもカルガモが親子で歩いていた話を聞きました。そこも周辺に水辺はないところだったそうです。カルガモはカモ科マガモ属で河川や湿地、干潟や



水田に生息しますが、同じマガモ属系アヒルとの交雑で特に都市部ではカルガモの多くがアヒルとの雑種でヒトを恐れぬ行動をとるようになったそうです。外形に関する遺伝形質はカルガモのほうが強いため、見た目はカルガモでも、性格はアヒルに近いものが現れたとのことでした。(笠原)